



第1回 キヤノンメディカルシステムズ

大森 翼 キヤノンメディカルシステムズ

はじめに

近年、少子高齢化が進む中、医療現場は、医療スタッフの不足という環境の下で、医療DXの推進が求められている。私たちキヤノンメディカルシステムズは「Made for Life」という会社スローガンのもと、これからデジタル情報のオープン性やクラウドを最大限活用したデータの統合を推進し、Deep Learningなどを活用した先進のAI技術を搭載したソリューションを開拓していくと考えている。“臨床における意思決定支援”は、それらの情報を活用し、医療者がより適切な治療・予防法を選択する手助けをするとともに、患者本人が納得できる診療の選択を共同で行えるように、可能性を挙げています。

キヤノンヘルスケアITが目指すビジョンはあらゆる人々が自分らしく生きるために必要な医療を受けられる未来、1人1人に最適化された質の高い医療の実現である。これまでお客様と共に作り上げてきた「画像情報」「データの収集と統合」「解析」「情報の加工と提供」の分野におけるITソリューションを以下ご紹介する。

院内システムにおける課題点と改善点

医師の働き方改革が2024年問題などと言われている通り、撮影画像の高精細化や電子カルテ機能の強化に伴い、医療従事者がシステムを操作する時間は増加の傾向を辿っている。

多くの場合、電子カルテシステムや医用画像保管システム、その他レポートシステムやスキャン文書などはシステムごとに情報が保管されているため、一覧で参照するには各システムを横断して情報を

参照する必要がある。その場合、医療従事者は患者様単位で各システムの情報を複雑的に遡るために、その分システムを操作する時間が増えてしまうという問題点がある。また、部門システムごとの検査結果確認を行うために、いくつものタブを立ち上げながら情報を比較する、その中から患者にとって禁忌となる危険値を見落とすことなく管理するのは非常に困難なことであり、これらの事項を人海戦術で対応しきるにはあまりにも業務負荷が大きいと考える（図1）。

そこで、キヤノンメディカルシステムズからは医療の質を維持（向上）しつつ、業務改善のために、院内で混在している医療情報を収集・共有・利活用できるようなツールが必要であると考え、情報の構造化、業務負荷の改善を組み合わせることで病院DXの実現を目指すシステムを開発した（図2）。以下、医療者の診療効率化に繋がる新しい診療支援ソリューション“医療情報統合ビューア Abierto Cockpit”を紹介する。

医療情報統合ビューア Abierto Cockpit (アビエルトコックピット)

キヤノンメディカルシステムズが提供する医療情報統合ビューア Abierto Cockpit は、患者さんの治療や検査の情報を時間軸で統合し、診療シーン別に最適な情報を提供することができる（図3）。電子カルテシステムに保管された診療情報と医用画像保管システムに保管された検査画像情報、さらに文書管理システムに保存されたスキャン文書データや同意書・紹介状などの電子データを一つの画面内で統合して表示する。また、表示の際に Abierto Cockpit 内で統一性を持たせたパネルで表現するため、表示順やデザインもばらつきがなく、同じ精度かつ各々の診療情報を時間軸連動させて情報参照ができる点が特徴である。

主な表示項目としては、患者の基本情報や既往歴、アレルギー情報等を表示する患者プロファイルパネル、検査画像を表示するPACS画像パネル、点滴・注射・



図1 医療現場における様々な課題点
病院デジタルトランスフォーメーション、タスクシフティングへの「阻害要因」の排除が必要